

七木田 文彦 著

『健康教育教科「保健科」成立の政策形成  
均質的健康空間の生成』

田代 美江子 (埼玉大学)

日本における「健康教育」、それを担ってきた「保健科」に関する歴史的研究は、未だ、十分な成果が積みあげられているとは言えない領域である。特に、「戦前・戦中・戦後」を通して、日本の「健康教育」の様相、内実を連続的に描こうとする研究は、評者が知る限りでもほとんどなく、本書は、こうした看過されてきた研究課題に迫るものである。また、単純な教科としての「保健科」成立史ではなく、その歴史的背景を「衛生教育」「健康教育」といった1920年代以降の健康教育をめぐる動向を前史として位置づける点で、敗戦後の「保健科」の課題の根源に迫りうる研究でもある。

以下ではまず、本書の概略について、単純な疑問も多少示しながら押さえておきたい。

序章に示されている「研究の主題」は、「1920年代から1947(昭和22)年までを対象として、日本の学校において、教育課程に健康教育教科「保健科」が位置づけられる過程を歴史的に考察すること」とされている。また、ここで筆者は、1941年に誕生した「健康教育」が、「健康知識・技術」を配分し、「画一的なライフスタイル」、つまり「均質的

な健康空間」を形成する機能を持つものとして成立したとの立場から出発している。

筆者は、健康教育科「保健科」の成立史を叙述するにあたり、次のような時期区分を採用している。第1期は、日本の学校において米国のHealth Educationが思想的に受容された1920年代から1936年頃まで、第2期は、戦時体制下強化の中で体錬科体操「衛生」として健康教育教科体制が形成された1937年から1945年の敗戦までの時期、第3期は、敗戦後、戦後教育改革によって「保健科」が制度的に成立した時期である。

この時期区分に従い、第1章「戦前昭和期における健康教育運動の興隆過程」では、学校という場で「健康教育」機会が模索されるようになる契機を、学校における「健康教育運動」の萌芽から探っている。ターナーの米国健康教育思想とその受容過程を詳細に検討することによって、運動の中で展開される学校における「健康教育」の重要性認識や具体的政策の展開を描き出している。

ここでのさらなる興味としては、米国における健康教育運動、健康教育思想隆盛の社会的背景はどのようなものであり、また、米国の健康教育運動は、国際的な動向の中で、どのような位置を占めていたのかという点である。

第2章「戦時下健康教育運動の改革過程」では、健康教育運動の実態を史料から丁寧に読み解きながら、戦時下における学校衛生改革が、個々の身体を取り巻く環境を変化させていったことが明らかにされている。学校教育そのものが総力戦体制を支える手段の一つとされていく中で、健康教育運動の展開によって学校教育の課題となりつつあった健康教育もまた、国民学校体錬科と強い結びつきを持つようになり、体錬科体操「衛生」としてカリキュラムに位置づけられていく過程を明らかにしている。

ここでの疑問は、戦時下における学校衛生改革に対する「非合理」対「合理」といった評価についてである。筆者は、これまでのファシズムによる「非合理的な改革」という評価に対し、「同時代的な理解」、「同時代評価」では「合理的」なのだと主張している。しかし、問題は、合理・非合理の判断ではなく、健康教育がどのように具体化され、何を目的に行われていたのかという点ではないだろうか。この点について、「非合理」とする側と認識が異なるとすれば、それはどういった点な

のであろうか。

第3章「戦後教育改革における『保健科』の成立」では、占領政策の具体的方向が定まる1947年までの「保健科」の政策形成過程を検討している。第一次米國教育使節団報告書に示された「健康教育」の内容、その前提となるメンバーやCIE内の体制について押さえ、占領軍側が、それまでの日本の健康教育についてどのように把握していたのかを明らかにしている。さらに占領軍の指導をふまえ、「保健科」を実際につくりあげていく文部省体育局の体制についても詳細に検討されており、特に、戦時下の「体育局」がそれを担う部署として再設置された事実の指摘は、敗戦後の健康教育の動向との関連で非常に興味深い。文部省体育局保健課は、外郭団体である日本学校衛生会や地方保健所など、学校外部との協力体制によって学校衛生の基盤を固めていくが、「保健科」は「体育科」との合科型教科として成立していくことになる。その過程に、「体育運動」と「衛生（保健）」を含む「広義体育論」か、「体育運動」のみの「狭義体育論」かといった「体育」概念をめぐる議論が存在し、それによって、「保健科」の方向性が左右されたという事実の指摘は重要である。それは、「保健科」教科としてのあり方にとどまらず、その実践内容や担当教員の問題にまで発展する大きな問題となるからである。

ここでの疑問の一つは、筆者自身が結章で、今後の研究課題としてすでにあげていることと一致する、「体育」概念の問題である。「体育科」との合科型教科として「保健科」が成立したとすれば、「体育」概念における健康観や身体観、スポーツのとらえ方などとの関連で「保健科」の課題を明らかにすることが可能だと考えられる。また、「体育局の再設置」について、「戦時色を払拭し、戦後も存続したことは占領政策との関連で見ると興味深い」とあるが、単純な「戦時色の払拭」ではなく、戦後の健康教育、「保健科」の本質と関わる問題であると考えられないだろうか。

結章「能動的主体形成の目的化とその構造——総括および今後の研究課題——」では、各章の総括とともに、健康教育教科の導入過程が、「予防医学の成果を背景として、人々に対する健康で合理的な生き方を推進するシステムの成立過程でもあった」と結論づけている。

全体を通じて、「思想史、制度史、政策史にわたっ

て重層的なアプローチ」によって、歴史的な観点から健康教育科「保健科」成立史を描くことに成功しているといえよう。史料の地道な発掘と読解に裏付けられた手堅い研究となっている。さらに言えば、「健康教育」研究分野におけるこうしたアプローチをとる研究は貴重であり、すでに指摘したように、日本の健康教育、「保健科」の課題に迫りうる有効な方法だと考えられる。

結章において、すでに筆者自身がいくつかの残された課題について整理しているので、ここでは、本書から刺激を受け、さらに議論を深めたいと考えた点をあげておきたい。

ひとつは、「健康」とはどういった状態のことと理解され、「健康」の目的が何に置かれてきたのかという問題である。本書ではもちろん、時代区分に従って、その時その時の「健康教育」の目的をある程度描き出しはいる。それは例えば、戦時下であれば「衛生訓練」という形で、「皇国に捧ぐる身体錬成の態度」へと接続されていくことの指摘などによってである。思想史研究でなくとも、「健康」とはどういった状態をいい、何のための「健康」なのかといった点は、教育政策にも大きく反映されるはずの大きな論点である。

実際、「健康」観は、優生思想やそれと関わる「障害」観とも関わり、大きく変化してきている。言うまでもなく、総力戦体制下では、男性の健康は強兵のためにあり、女性の健康は、銃後を守り、「産めよ殖やせよ」といった国策に協力するために必要とされてきた。しかし、身体、健康、性といった観点から、教育の歴史を見るといった研究の成果が未だ不十分なため、こうした当たり前の指摘は意外となされていないのではないかと評者は考えている。その意味で、本研究が、それぞれの時代区分に従って、「健康」概念と「健康教育」の目的の継続性と変化を明示的に整理できれば、「健康教育」という視点から、国策遂行のための身体・健康管理を教育が担われてきたという事実を浮き彫りにできる可能性を持つものであると思う。同時に、「健康（教育）」が何に利用されてきたのかを明らかにすることは、現代における「健康」が、未だに、私たちにとっての権利となり得ないことの基盤を明らかにするために深める必要のある課題でもある。

二つ目は、本書のキーワードでもある「均質的健康空間」という用語に込められた筆者の意図に

ついてである。筆者は、この「均質的健康空間」を形成する機能として「健康教育」が成立したと述べており、「個人の経験とは切り離された抽象的で一般化された内容」、「医学や疫学調査の成果によって裏付けされた知識や技術」によって、「人々が健康といった価値観を無条件に引き受けることにより、人々の前に絶対的なものとして現れ」といった指摘を序章で行っている。先の、「健康」観、「健康の目的」とも関わって、「均質的健康空間」とは、いったいどのような空間なのであろうか。

筆者自身も、現代の保健科教育において「健康の価値を自明のこととして進める」ことに疑問を呈しているように、「自明のこと」とされること自体に、個々の「権利としての健康」とは矛盾する問題が内包されているように思う。こうした点からも、これから展望していく「健康教育」はこの「均質的健康空間」形成とどのような関係にあるのだろうか。

最後に、本書を読みながら、私の中でくり返し想起されたことについて触れておきたい。それは、私の友人である養護教諭のほとんどが、「健康」という価値観に対して懐疑的だということである。その「疑い」の背景には、障がいを持つ子どもたちの「健康」とは何なのか、経済的貧困と「健康」の関連をどう考えるのかといった、現場の養護教諭が実際に向かい合う子どもたちの現状と、「均質的健康空間」を形成しようとする「健康教育」の中の「健康」という価値の乖離がある。この「健康」という価値による選別・競争といった状況が、過去からの積み重ねによって作られ、未だにそこから抜け出せていないことを本書によって再確認し、それらの問題の本質について多くの示唆を得ることができた。

(学術出版会刊 2010年11月発行 A5判 292頁 本体価格5,200円)